

一般学級における、国際理解をテーマにした道徳授業の実践
—国や民族の文化の違いに出会ったら—

劉梶本 雪梅 (小栗栖中学校)

1. 実践校の現況

小栗栖中学校は、全校生徒数 313 名、その内、中国・帰国生徒を中心として外国にルーツをもつ生徒が 20 名在籍している。

その中には、中国語を話す友人がいる、ムスリムの生徒がスカーフを着用している、などが日常の学校生活で当たり前となっている生徒がいる一方、外国にルーツをもつ生徒は、ほとんどが日本生まれであるため、一般の生徒が学校において意識的に「異文化」と出会って、戸惑ったり考えたりすることは少ない。

学校においては、日本語教室が設置されており、希望する生徒が放課後に教科の学習をしたり、中国語の学習をしている。現在、日本語教室への来室数は少ない状況であり、全校的な日本語教室への認識や理解については低い状況である。

2. 実践の概要

今回の実践では、学校で取り組まれている『学年ローテーション道徳』において、3年に所属している日本語教室担当教員が『国際理解』をテーマに、3年生の全クラス(4学級)を対象に授業を行ったものである。

取り組む際には、「外国人生徒・外国にルーツのある生徒」の存在や本校の日本語教室について知ること、「生徒自身がこの先異文化に出会ったときにどのような態度をとれば良いのか」、の2点について生徒自身が考える機会となることを授業のねらいとした。

50分の授業時間の中、初めの10分を授業者の紹介の時間として設定し、授業者の校内外における職務の紹介を切り口として、京都市に数多く在籍している来日間もない生徒が日本語習得のために学習していることや本校

の日本語教室で行っている学習の内容などについて話した。残りの40分間では、中国から来日して半年の中学校2年生生徒、王くん(仮名)の事例を資料として取り上げずめていくことにした。

授業展開では、「なぜサッカー部に入っている王くんは、朝練や土日・祝日の部活動に来ないのか」についてその理由を考えるとところから始め、実際の王くんの思いや考えを知った上で、「どのように王くんに接したら良いのか」についてクラスメイトやチームメイトとしての立場から生徒たちに考えさせていった。

授業の最後では、部活動に関わる日本と諸外国(中国)の文化の違いを示した後、授業のふりかえりとして感想を書かせて終えた。

3. 授業での生徒たちの意識の変容

多くの生徒は、部活動を休む王くんの思いや考えを知り、王くん自身の思いや考えを尊重しつつも、「何とか王くんがしんどくても、土日祝日や朝の練習に来るように働きかける」と答えたが、中には、「自分が休みたいからと言って休むような自己中心的な考えは通用しない」、「部活中で決めたルールは守ってほしい」、「冷たい態度をとる、喋らない」、「やめてほしい」といった意見も出された。

このような意見の生徒も、『部活動に関する日本と諸外国(中国)の違い』を提示したことにより、驚いた表情を見せ、王くん自身の思いや考えの背景にあるものへと思いを寄せることができた。

授業の感想にも、「王くんのような生徒に出会ったら、自分なりに優しく接してあげられたらいいな」と王くんの思いに歩み寄る姿勢を示すなどの変容が見られた。

4. 実践を終えての成果と考察

授業の中で取り上げる外国人生徒については、授業者が実際に日本語を教えていた生徒である、と紹介していることから、京都市に在籍する外国人生徒の存在を伝えることができた。また、授業者の職務が本校で日本語での会話が困難であったり、日本語での説明が難しかったりする保護者への通訳を行うことや本校の日本語教室での語学などの学習サポートであることを説明することもできた。さらに、身近な友人やクラスメイトにも外国にルーツのある生徒が多く在籍していることも確認できる機会となった。

取り上げた事例の場面設定が生徒にとって身近な部活動であり、登場人物も中学2年生の外国人生徒であったことから、生徒自身が親近感を持って異文化との出会いについて考えられる機会となり、王くんの事例を紹介する前に、「みんなにとっての[部活動]ってどういうもの？」という発問を投げかけたことも、部活動に対する日本と諸外国(中国)との違いに興味を持たせる要因となったと考える。

異文化に出会った時、相手の文化を受け入れたり尊重したりすることは、自分と相手関わっているその物事に対して、自分がどれだけ大事にしているか、重きをおいているか、によって変わってくる。

本時の事例では、「部活動」を取り上げたが、「部活動」を一生懸命に取り組んでいる生徒であればあるほど王くんの存在は受け入れ難く、「部活動」に参加していない生徒や「部活動」をそれほど重要視していない生徒であれば、比較的王くんの思いや考えは、受け入れやすかったのではないかと考えられる。

始めは、王くんの存在を受け入れがたいと感じていた生徒たちが、王くんの考えや思いが「ただの自分勝手なものではなく、国や民族の文化の違いが背景にあること」に気づけたことは、大きな学びがあったと言える。

5. 今後の実践に向けて

小栗栖中学校の生徒は、主に校区の3つの小学校の児童が入学してくる。3つの小学校のうち二校に日本語教室(国際教室)が設置されており、一校にはない。そのことから中学校へ入学してきた生徒の異文化体験には差があり、日本語教室のない小学校出身でかつ、身近な存在として、外国にルーツのある友人がいない生徒たちが捉える「国や文化の違いへの考えや理解」は、設置校出身の生徒と大きく異なるものであると考えられる。

これらの生徒たちにとって、今回の実践は従来から育んできた個々の学習経験などを生かしたものとはならなかったものの、一人の外国人生徒の事例を切り口として、学級全体で「国や民族の文化の違い」について具体的に一緒に考えたこと、そのものにおおきな意味があったと考える。

今後の実践においても、生徒一人ひとりが異文化に対して理解を深め、今後新たに出会う異文化に対して、どのように考え、行動していけばいいのかについて考える機会をより多くしていけるよう、定期的かつ継続的な実践を重ねていきたい。

注)

1) 外国人生徒・外国にルーツのある生徒…国籍に関わらず、来日年数の浅い生徒で、日本語指導や様々な支援が明らかに必要な生徒を「外国人生徒」、本校に多数在籍している日本生まれや幼少期の来日の生徒を「外国にルーツのある生徒」と使い分けた。生徒にとってイメージしやすいと考え、授業中に使った表現を、そのまま、本稿でも使ったものである。